

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

最終改訂年月 : 26 February 2001

背景: ウェルニッケ・コルサコフ症候群では、ビタミンB1(チアミン)欠乏が重要な役割を担う。栄養を主としてアルコールに依存している長期のアルコール中毒者に生じる脳損傷の一種である。通常、急性症候群(ウェルニッケ脳症)では回復が可能である。重大な健忘症候群(コルサコフ精神病)への進展は、高用量チアミンを適時注入投与することによって回避が可能である。チアミンは、アルツハイマー病において有益な効果をもたらすであろうと示唆されている。

目的: 本システムティック・レビューの目的は、アルツハイマー病患者におけるチアミンの有効性について評価することである。

検索戦略: thiamin*、vitamin-B1、B1、「Vitmain B1」の検索語を用い、2003年2月12日にSpecialized Register of the Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Groupの最終更新版を検索することによって試験を抽出した。本登録は定期的に更新されており、全ての主要な医学データベース(MEDLINE、EMBASE、CINAHL、PsycINFO)および多くの試験データベースから得られた記録が含まれている。また、各レビューアが既報レビューおよび進行中の会議に関する書誌を検索し、追加データを入手するため製薬会社および研究者と接触した。

選択基準: アルツハイマー型痴呆患者にチアミンが2日以上投与され、プラセボと比較された全ての交絡のない二重盲検ランダム化試験。

データ収集分析: 2名のレビューアが独立してデータを抽出し、オッズ比(95%CI)または平均差(95%CI)を推定した。

主な結果: 3件の試験を登録した。2つのクロスオーバー試験では、第I相の結果が報告されていなかった。メタアナリシス用として結果をプールすることはできなかった。Nolan 1991では、試験完了者における3、6、9、12ヶ月目のMMSEから見て、チアミンがプラセボと比較して効果的であるとのエビデンスはないと示す結果が報告されている。Meador 1993aでは、ベースラインと比較した3ヶ月目のADAS-Cog測定値から悪化が認められた患者は、チアミンの8名中3名に対してプラセボの9名中6名であると示されているが、統計的有意差はなかった。Blass 1988およびNolan 1991では試験中に有意な副作用は認められなかったと報告されている一方、Meador 1993aでは副作用について述べられていない。Blass 1998では16名中5名、Nolan 1991では15名中5名が試験を終了していないと示されているが、いずれの試験でもこのような患者が属していた群について述べられていない。

レビューア見解: 本レビューから何らかの結論を導くことはできない。各試験に登録された患者数は50名未満であり、報告された結果は不十分なものである。

Citation: Rodriguez-Martin JL, Qizilbash N, Lopez-Arrieta JM. Thiamine for Alzheimer's disease. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2001, Issue 2. Art. No.: CD001498. DOI: 10.1002/14651858.CD001498.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Dementia and Cognitive Improvement

* ご注意: この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。